

## 私の迷子経験



寿都医師会／胆振西部医師会  
豊浦町国民健康保険病院

秀毛 寛己

小学校入学前のある週末、三宮に蛍光灯などの買い物に、市電に乗って母と出掛けた。三宮センター街の入り口付近にあったS電社という、当時としては珍しい家電専門のデパートに入り、気に入ったデザインの和室用の蛍光灯を選んだ。その支払いが何かで母が離れ、自分がちょっと他の家電売り場に移動したのか忘れたが、気付くと大勢の買い物客に母の姿を見失ってしまった。

泣きそうになるのをこらえ、懸命に落ち着こうとした。そんなに時間が経ったわけじゃない。待っていればきっと母が戻ってくる。しかし、次々にやってくる見知らぬ人ごみに母の姿は無かった。パニック的不安と、それ以上に裏切られたような怒りを感じた。他人に「この子は迷子かな」とジロジロ見られてしまうのも嫌だった。

ここを出よう。走って店内を出て、センター街を突っ切って市電筋まで出ようとしたとたん、いきなり3人の通行人に衝突して倒れ、ひどい鼻血を出してしまった。その若い女性たちがハンカチを出して慌てて介抱しようと、口々に「ごめんね。大丈夫？ 病院行こう」「お母さんはどこ？」などと心配げに話掛けた。恥ずかしくかっこ悪かったので、嘘？を付いた。このあたりに住んでいる、家に帰るところだ、大丈夫ですと。そして責任を感じて不安そうな人たちを振り切るようにまた走り出した。

いったい家までどうやれば帰れるのか、途方に暮れた。お金も無く市電に乗ることもできない。両親から、迷子になっても絶対に、見知らぬ大人に付いて行ってはいけないと教えられていたので、派出所を探そうとしたが、三宮の繁華街の中心で皆目見当も付かなかった。周囲に妙な隙を与えないために、できるだけ地元の子どもの装いながら、今にも泣き出しそうな気持ちを抑えて思案した。歩いて帰るしかない。でもいったいどれほどの距離なのか？ そうだ山の方向に行こう。市電の中から見えていた景色を思い出し、レール沿いの道を山に向かって歩きだしたが、周囲の建物や景色に見覚えも無く、本当にこれで正しいのか分からない。方針を変えて、大人に助けを求めようかと弱気になったが、優しくなおじさんが実は怖い人さらいかも？とひねくれた解釈をする自分の心の反論に逆らえず、また、とぼとぼと布引の山とおぼしき方向に歩いた。

加納町3丁目交差点に来たとき、ここまでは正しいと思えた。歩くのと市電では時間の差がありすぎること愕然となったが、継続して山の方へ進路を取った。この三差路を間違えると、全然違う中山手方向に行ってしまう。

それから失意の中、どれくらい歩いたか分からないが、見覚えのある生田川の橋と布引中学の円筒校舎や、旧中央市民病院の光景をはっきり確認したときに、これは夢じゃないと帰宅への希望の灯がやっと見えてきた。このあたりは登山で父母と数回来たことがある。嬉しくて涙が出そうだった。雲中小学校の赤レンガ塀の前を市電筋に沿い小走りに東へ進んだ。

自宅に到着して覚えているのは、鼻血のシャツにあっけにとられた父の表情と、チョコバーをのんびり食べていた弟に無性に腹が立ったことだけ。自分も早速、父に買ってもらって食べた。後で聞くと母は店内を捜しに捜し、店を通じ警察に届け、さらに警察は神戸市中の派出所などに連絡を回してくれて発見を待たらしい。「迷子は泣くから届け出がすぐあるはず」との警察の見解に反して連絡が全く無く、改めて「ぼっちゃんはどうな性格ですか？」と聴かれ「短気な子です」と答え、「まさかとは思いますが、自宅に戻っている可能性はゼロでは無いので一応確かめて」と言われたらしい。当時、電話は商家に付いている程度だったため、近隣の果物屋さんに掛け、父を呼んで貰い、ほんとに帰宅していることが分かり、父も独りで戻ってきた理由が判明して双方共びつくりしたとのことだった。「お母ちゃんが迷子になった」と言って帰宅したらしい。「誘拐されたかと生きた心地がしなかった。もうくたくたと嬉しそうに帰ってきた母の安堵の表情に、「こんな目に遭わされたこっちの気にもなってみろ」というような口答えをしたように思う。市電で30分ほどの距離だったと思うが、6歳になったばかりの子どもには、見知らぬ外国を独りで彷徨わされたような感覚がした。

今年5月末に、山中で行方不明になった子どもの事件で、世間一般の大人の想像通りで無い結末を見て、ほっとすると同時に、やはり子どもというものは、いつの世も大人が考えているような単純な子どもではないんだなと思った。